

- 環とイデアルの定義を述べ、 \mathbb{Z} のイデアルを決定する。
- 応用として、 $113 \cdot 22 + 355 \cdot (-7) = 1$ のように「互いに素な自然数 a, b に対し、うまく整数 x, y を選んで $ax + by = 1$ とできる」という初等整数論の命題を証明する。

定義：環とは、以下の 7 つの公理を満たす 5 つ組 $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ のことである。ここで R は集合、 $+, \cdot : R \times R \rightarrow R$ は写像、 $0_R, 1_R \in R$ である。

- (1) $\forall a \in R, \forall b \in R, \forall c \in R, (a + b) + c = a + (b + c).$
- (2) $\forall a \in R, \forall b \in R, a + b = b + a.$
- (3) $\forall a \in R, 0_R + a = a = a + 0_R.$
- (4) $\forall a \in R, \exists b \in R, a + b = 0_R = b + a.$
- (5) $\forall a \in R, \forall b \in R, \forall c \in R, (a \cdot b) \cdot c = a \cdot (b \cdot c).$
- (6) $\forall a \in R, 1_R \cdot a = a = a \cdot 1_R.$
- (7) $\forall a \in R, \forall b \in R, \forall c \in R, a \cdot (b + c) = a \cdot b + a \cdot c, (a + b) \cdot c = a \cdot c + b \cdot c.$

例： $(\mathbb{Z}, +, \cdot, 0, 1)$ は環である。

例： $M_n(\mathbb{C}) := \{n \times n \text{ 複素行列}\}$ について、 $(M_n(\mathbb{C}), +, \cdot, O_n, E_n)$ は環である。

用語：環 $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ が以下を満たすとき、可換環という。

- (8) $\forall a \in R, \forall b \in R, ab = ba.$

例： \mathbb{Z} は可換環である。 $M_n(\mathbb{C})$ は $n \geq 2$ のとき可換環ではない。

例： $\mathbb{C}[x] := \{\text{複素係数多項式}\}$ について、 $(\mathbb{C}[x], +, \cdot, 0, 1)$ は可換環。

用語：可換環 $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ が以下を満たすとき、体という。

- (9) $0_R \neq 1_R$ かつ $\forall a \in R, a \neq 0_R \Rightarrow \exists b \in R, ab = 1_R = ba.$

例： \mathbb{Z} は体ではない。 $\mathbb{Q}, \mathbb{R}, \mathbb{C}$ は体である。

例： $\mathbb{H} := \{a + bi + cj + dk \mid a, b, c, d \in \mathbb{R}\}$ に

$$i^2 = j^2 = k^2 = -1, \quad ij = k = -ji, \quad jk = i = -kj, \quad ki = j = -ik$$

で「積を入れたもの」を 4 元数環という（しばしば 4 元数体とも呼ばれる）。

- \mathbb{H} は環だが可換環ではない。
- \mathbb{H} は (8) 以外の公理 ((1) から (7) および (9)) を満たす (斜体)。

用語：可換環 $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ が以下を満たすとき、整域という。

- (9') $0_R \neq 1_R$ かつ $\forall a \in R, \forall b \in R, a \neq 0_R, b \neq 0_R \Rightarrow ab \neq 0_R.$

例： \mathbb{Z} は整域である。 $M_2(\mathbb{C})$ において $\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}^2 = O_2$ だが、そもそも $M_2(\mathbb{C})$ は可換環ではない。

命題： $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ を環とする。

(A) $x \in R$ が (3) を満たす (つまり $\forall a \in R, x + a = a = a + x$) ならば $x = 0_R$ 。

(B) $y \in R$ が (6) を満たす (つまり $\forall a \in R, y \cdot a = a = a \cdot y$) ならば $y = 1_R$ 。

証明： (A) $a = 0_R$ とすると、 $x + 0_R = 0_R$ 。 一方 (3) より $x + 0_R = x$ である。 (B) も同様。

命題： R を環、 $a \in R$ について、 $b, b' \in R$ が以下を満たすならば $b = b'$ 。

$$a + b = 0_R = b + a, \quad a + b' = 0_R = b' + a$$

証明： $(b' + a) + b = b' + (a + b)$ だが、「左辺 = b 」と「右辺 = b' 」を導くことができる。

記法： すぐ上の命題より (4) の b は一意的である。 これを $-a$ と書く (注意： $-(-a) = a$ である)。

命題： R を環とすると、 任意の $a \in R$ について、 $(-1_R) \cdot a = -a$ かつ $0_R \cdot a = 0_R$ 。

証明： $0_R = 0_R + 0_R$ より、 $0_R \cdot a = 0_R \cdot a + 0_R \cdot a$ 。 両辺に $-(0_R \cdot a)$ を加えると $0_R = 0_R \cdot a$ を導くことができる。 $(-1_R) \cdot a = -a$ を言うには、 $a + (-1_R) \cdot a = 0_R$ を言えばよいが

$$a + (-1_R) \cdot a = 1_R \cdot a + (-1_R) \cdot a = (1_R + (-1_R)) \cdot a = 0_R \cdot a = 0_R.$$

系： R を環とすると、 $(-1_R) \cdot (-1_R) = 1_R$ 。

証明： すぐ上の命題より、 左辺 = $-(-1_R) = 1_R$ 。

注意： 以下、このような常識的な変形は断りなく用いる。 例えば、 $ab = 1_R = ba$ となる b を a^{-1} とか $\frac{1}{a}$ と書く、 などである。 a^{-1} の一意性や、 $(a^{-1})^{-1} = a$ についても同様である。

命題： 有限整域は体である。

証明： R が整域のとき、 $R \ni a \neq 0_R$ について、 写像

$$f_a : R \rightarrow R, x \mapsto ax$$

は単射である (実際、 $ax = ax'$ ならば $a(x - x') = 0_R$ だが、 R は整域なので $x - x' = 0$ 。 よって $x = x'$ である)。

一般に有限集合 X について、 単射 $g : X \rightarrow X$ は全射でもあることに注意すると、 R が有限集合であれば f_a は全射である。 つまり $\exists b \in R, f_a(b) = 1_R$ 。

注意： 「有限斜体は体」であることも知られている (Wedderburn の定理)。

定義：可換環 R の部分集合 $I \subseteq R$ がイデアルとは、以下の 3 条件をみたすことである。

- (I1) $I \neq \emptyset$.
- (I2) $\forall x \in I, \forall y \in I, x + y \in I$.
- (I3) $\forall a \in R, \forall x \in I, ax \in I$.

例： $R = \mathbb{Z}$ において、 $I = 2\mathbb{Z} = \{2x \mid x \in \mathbb{Z}\} (= \{ \text{偶数} \})$ は R のイデアル。一方、 $I' = \{ \text{奇数} \}$ は R のイデアルではない。

注意：イデアルの定義で、(I1),(I2),(I3) を (I1'),(I2),(I3) に変えても同じ。

$$(I1') \quad 0_R \in I$$

証明：(I1),(I2),(I3) \Rightarrow (I1') を言えばよい： $i_0 \in I \neq \emptyset$ を取る。このとき $0_R \cdot i_0 = 0_R \in I$ 。

例： $I = \{0\}$ および $I = R$ は R のイデアル。

注意：イデアル $I \subseteq R$ について、 $I = R \Leftrightarrow 1_R \in I$ 。

証明： \Rightarrow は明らか。 \Leftarrow を言うには、 $I \supseteq R$ を言えばよい：任意の $a \in R$ について、 $a \cdot 1_R = a \in I$ 。

定理： \mathbb{Z} のイデアル I について、 $\exists! d \geq 0, I = d\mathbb{Z} (= \{dx \mid x \in \mathbb{Z}\} = \{d \text{ の倍数} \})$ 。

証明： d の一意性は明らかである。 $I = \{0\}$ ならば $d = 0$ なので、 $I \supsetneq \{0\}$ とする。

主張： $\Sigma = \{i \in I \mid i > 0\}$ とすると $\Sigma \neq \emptyset$ 。

実際 $0 \neq i_0 \in I$ が取れるが、 $(-1)i_0 \in I$ でもあるのだった（主張の証明終わり）。

$d = \min \Sigma$ について $I = d\mathbb{Z}$ が分かる。実際 $d \in I$ なので $d\mathbb{Z} \subseteq I$ である。逆に、 $i \in I$ を d で「割り算」すると

$$\exists q \in \mathbb{Z}, \exists r \in \mathbb{Z}, 0 \leq r < d, i = dq + r$$

となる商 q と余り r が取れるが、 $r = i - dq \in I$ なので、 d の最小性より $r = 0$ 。

応用： $a, b \in \mathbb{Z}_{\geq 1}$ が互いに素なとき

$$\exists x \in \mathbb{Z}, \exists y \in \mathbb{Z}, ax + by = 1.$$

証明： $I := \{ax + by \mid x, y \in \mathbb{Z}\} (\supsetneq \{0\})$ は \mathbb{Z} のイデアルであることが確認できる。上記定理より $\exists! d \geq 1, I = d\mathbb{Z}$ である。 d は $a, b \in I$ を割り切るので、 $d = 1$ でなければならない。よって $1 \in I$ 。

例： $113 \cdot 22 + 355 \cdot (-7) = 1$ 。